

巖谷小波の「全鮮巡回お伽講演会」：朝鮮児童文学 と巖谷小波 その二

金, 成妍
九州大学大学院比較社会文化学府博士課程一年

<https://doi.org/10.15017/8479>

出版情報：九大日文. 5, pp.245-265, 2004-12-01. 九州大学日本語文学会「九大日文」編集委員会
バージョン：
権利関係：

巖谷小波の

「全鮮巡回お伽講演会」

——朝鮮児童文学と巖谷小波 その二——

金成妍

はじめに

巖谷小波は本名巖谷季雄、一八七〇（明治三）年六月六日、東京麹町区平河町五丁目十番に、父修、母八重子の三男として生まれた。父修は一八五四（安政元）年二一歳、近江水口藩の藩医として藩主加藤明軌に仕える一方、藩儒中村栗園につき、漢方の外西洋医学を学んだ。修の二度目の妻であった八重子は、小波を生んで四ヶ月後の一八九〇（明治三）年一〇月一日、三歳で病没した。生母の死後、小波は近くの長松男爵邸内の仕立屋北沢周作方に里子として出された。その間に、父修は、鴻ノ巣の酒造業横田家の娘茂登子と一八七三（明治六）年に結婚した。小波が実家に戻ったのは一八七四（明治七）年、五歳の時であった。継母の茂登子は実子同様に愛したので、小波は一五・六歳になるまで継母とは気付かなかつたという。

小波が一歳の時、ドイツ留学中の長兄立太郎よりオットーのメルヘン集が贈られた。ドイツ語学習のためという配慮で贈

られたものだったが、小波にとつては「一代をお伽生活に委ねる、最初の動機をなしたもの」となった。長兄立太郎は採鉱冶金を修め、次男弁二郎は日下部鳴鶴の養子となった。父修は子供の一人は家業である医師を継がせたいと思い、その希望を小波に托した。しかし、小波は医者になることを拒み、文学への夢を抱くにいたる。小波は一八八七（明治二〇）年、文学結社硯友社の同人となり、機関紙『我楽多文庫』に「真如の月」を発表、初めて「漣山人」の号を用いた。

一八九〇（明治三）年一月に硯友社社員と共に日本初めてといわれる文士劇を公演、同年一〇月には俳句結社「紫吟社」を創立する。一八九二（明治二五）年一二月から二年間は京都日出新聞社主筆を務める。一八九六（明治二九）年三月からは「木曜会」を開き、一九〇〇（明治三三）年九月、ドイツのベルリン大学附属東洋語学校の講師として渡欧する。一九〇六（明治三九）年二月に文部省図書課嘱託となり、以後二年間国定教科書の編纂に参与する。そして一九〇七（明治四〇）年四月、時の首相西園寺公望の文士招待会に招かれるが、児童文学者としては唯一の人選であった。また一九二一（大正一〇）年七月に文部省国語調査会の設立と同時に委員に推される。

佐藤道雅が『日本児童文学の成立・序説』において、「彼は、今私たちが連想するところの児童文学者とは、かなりイメージが違う。何よりも世を闊歩するジャーナリストであり、時の国家政策の方向と共同歩調をとり、政財界の人物とすら交流を持ち、その要請にもこたえる文士なのだ。」と述べているように

小波の活動は多方面にわたっているが、大きく執筆活動と口演活動に分けることができる。

まず執筆活動の方から概観すると、小波は一八九一（明治二四）年一月、博文館発行の叢書『少年文学』第一編に「こがね丸」を発表する。「こがね丸」は、少年のために書かれた初めての創作童話として迎えられる、小波を日本児童文学の先駆者なる位置に立たせる発端となる。「こがね丸」で好評を得た小波は、引き続き同叢書九篇「当世少年氣質」と二三篇「暑中休暇」を著わし、博文館の『幼年文学』二篇に「猿蟹後日譚」を発表する。さらに同年には、月刊となった『日本昔噺』叢書の著作を委託され、第一篇「桃太郎」から「鼠の嫁入」までの二四篇を完成させる。小波と博文館の縁は、一八九四（明治二七）年、大橋新太郎の要請を受けた小波が京都の日出新聞社を退職し、博文館の編集局に入ることによって、さらに深まることになる。博文館は一八九五（明治二八）年一月、それまで刊行した『幼年雑誌』『日本之少年』『少年文学』『幼年玉手箱』『学生筆戦場』などを廃刊して『少年世界』を発行したが、その主筆に小波を迎えた。小波は「お伽噺」という用語を使用、『日本昔噺』（二四編、明治二七年）、『日本お伽噺』（二四編、明治二九年）、『世界お伽噺』（二〇〇巻、明治三年）、『世界お伽文庫』（五〇編、明治四一年）、『小波お伽百話』（明治四三年）などの叢書を完成、児童の読物が乏しかった時代に先駆的な業績を残した。

一八九六（明治二九）年、京都のある小学校で初めてお伽噺の口演を試みた小波は、一八九八（明治三一）年から大日本婦人教

育会の囑託を受け、毎月一回、学院女学部及び幼稚園の園児にお伽噺の口演を行った。その後、一九〇六（明治三九）年頃博文館に入社した久留島武彦と共に講話部を結成、地方愛読者会巡回講演を企画するなど、日本に口演童話の文化を咲かせた。小波は一九二七（昭和二）年の退職まで依然執筆を続けたが、自らを「舌栗毛」と称するほど、年とともに口演活動が主となった。

さて、ここで、「朝鮮児童文学と巖谷小波」という本稿のタイトルを想起していただきたい。以上概観したように、小波の主な年譜や事項、そのどこにも朝鮮児童文学との接点は片鱗すら見当たらない。これまでの先行研究においても、小波と朝鮮児童文学との関連についての論考は管見によれば未見である。そこで本稿では、日本児童文学界に先駆的な業績を残した巖谷小波の活動領域が、朝鮮にまで及んでいたことを、筆者の発掘した新資料によって明らかにしたい。また、その活動時期に注目し、朝鮮児童文学の成立過程との関係性について考えたい。

筆者は前回の『九大日文』四号（朝鮮における「近代児童文学」の始まり―朝鮮児童文学と巖谷小波 その一―）において、朝鮮内部で起こった児童文学への動きをたどってみた。小波が初めて朝鮮に渡って口演を行った一九一三年、朝鮮には『児童雑誌の嚆矢』と言われる『赤い上着』や『子供の読み物』、『セツピョル』という雑誌が崔南善によって相次いで創刊されていた。すなわち、児童文学が芽ばえ始めた時期に小波の初口演が実現されたのである。それから一〇年が経った一九二三年の六月、小波は

本格的な「全鮮巡回お伽講演会」を掲げて再び朝鮮半島に渡った。一九二三年の朝鮮は、「児童解放論」が主張されており、少年会の全国的な拡充、「子どもの日」の全国規模の記念行事の実施、朝鮮初の本格的な児童雑誌『オリニ』の発刊など、児童文化活動の興隆期を迎えていた。また一九二三年という時点は、朝鮮に対する日本政府の政策面においても大きな転換期となつてゐる。当時総督府の施政方針は、「総督政治の基本を純然たる文治主義と為すの方針を明かにし大に文化的開発に力を盡したる」⁴⁾という、いわゆる「文化政治」が標榜されていた。総督府の御用紙として、「文化政治」の一環となる「政治宣伝」

にも多く利用されていた『京城日報』と『毎日申報』の共同主催で、小波の「全鮮巡回お伽講演会」が企画されたことは注目すべきである。この企画には、講演会の宣伝や講演日程報道の他、先発隊となつた「童話普及会」の幹事が前もつて講演の予定地を回るなど、徹底的な事前準備が行なわれていた。

それに加えて今一つ興味深い事実は、朝鮮における小波の活動が、童話を「聞かせる」口演活動にとどまらず、新聞に「創作」童話を発表することにつながつたことである。口演が行われた四ヶ月後の一九二三年一月二十五日付『毎日申報』には、「日曜附録婦人と家庭」欄が設けられ童話が掲載されることになる。この欄に初めて登場する童話が、小波の「白蛇が出かけた後」であつた。それから始まつた小波の童話は、『毎日申報』に四ヶ月間にわたつて一五回連載され、全一篇の童話が紹介された。小波がどういふ童話を朝鮮側に「読ませる」こととな

り、そこにはどんな目的によつて何がどう書かれていたのかについては、稿を改めて次回、論じることにする。

今回は、朝鮮で行われた小波の「全鮮巡回お伽講演会」の足跡を裏付ける史料の分析に重点をおく。この作業によつて、朝鮮児童文学の成立過程を日本側の動向という新たな角度から照射することができると考えられるからである。

本論に入る前に、本稿で扱つた研究資料について触れておきたい。

(一) 当時朝鮮で発刊されていた新聞(調査範囲と所蔵機関)

①『毎日申報』。一九一三年一月〜一九一四年二月、一九一九年一月〜一九二四年二月、韓国国会図書館所蔵

②『京城日報』。一九一八年一月〜一九二四年二月、東京国会図書館所蔵

③『朝鮮日報』。一九二〇年四月〜一九二四年二月、韓国国会図書館所蔵(一九二三年一月〜一月欠如、一九二三年七月八日〜一日欠如)

④『東亜日報』。一九二〇年四月〜一九二四年二月、韓国国会図書館所蔵(一九二〇年四月一〇日〜同月五日欠如、同年一〇月〜一九二二年一月発行停止処分)

(二) 日本の新聞―『読売新聞』(一九一三年一月〜一九三〇年二月)

(三) 当時朝鮮で発刊されていた雑誌、韓国国会図書館所蔵―

『開闢』、『オリニ』

(四) 日本雑誌―『少年世界』、『少年倶楽部』、『童話研究』、日本近代文学館所蔵

以上の基本資料に加えて、関連単行本を含め、小波の自伝、朝鮮口演をもとに雑誌に寄稿した原稿、そして朝鮮総督府発刊の各種統計資料、年表、当時の教科書などを参考にした。

用語の説明

歴史的・思想的コンテクストが曖昧になることを回避するために、原則として日本統治期の半島を表す表記に、朝鮮を使用することにした(一八九七年から一九一〇年までは大韓帝国を略して韓国と表記する)。

第一章 巖谷小波の朝鮮初口演

一九一〇年八月二二日の「日韓併合」を迎えて、『少年世界』は第一六巻第一三号を「日韓併合記念号」として発行している。それをめくると、一枚の写真と一枚の絵が象徴的である。「日本服を召させられたる李垠殿下」の写真と、「日韓併合記念」と記された表紙の下端に描かれている、日本服の少年が朝鮮服の少年に仲良く肩を組んでいる挿絵である。挿絵の左側には、「日出男、君はもう僕の家の子になつたんだよ。朝吉、あゝも

つと早く来ればよかつたねえ。」と記されている。

そこで小波は、「朝鮮の併合と少年の覚悟」という文章を通して、「日露戦争^{ニッポロソウセン}わ何の為めか?日清戦争^{ニッポロシヤウセン}わ何の為めか?皆朝鮮の為めであつた。」という書き出しで、日本と朝鮮の少年たちが心がけるべき事を述べている。先ず日本の少年には、「我が少年諸君わ、やがて第二の国民である。我が新帝国の未来わ、載せて諸君の双肩にある。」「今諸君わ、世界の日本の少年である。即ち他日世界の日本の国民として、之を辱めしぬ丈の覚悟を要する。覚悟にわ取りも直さず、之に従う知識と、度量が要る、而してその教養である。」。と述べている。その一方朝鮮の少年に向けては、もはや日本人となつた朝鮮の少年が「韓国の小国民」であつたことは「従来」のことであり、これからは「新日本の新国民」であることを強調している。新日本の未来のためには、「相互の意思の疎通」が必要であり、それを謀るためには、「言語と文学の画一」が要されると主張する。日韓併合以後、朝鮮に対する「国語普及」に力を注いでいた日本帝国の重要な政策の一端が窺える。

日本の国威を海外に広めることを積極的な立場で支持していた小波が、直接朝鮮半島に足を運ぶのは、一九一三年一〇月のことであつた。小波の四男、巖谷大四による伝記『波の聲音』の「年譜」には、「一九一三年九月、満州、朝鮮地方へ口演旅行」¹⁰と記されている。当時の新聞を調べてみると、一九一三年一月三日付の『読売新聞』には、「小波氏下関着」という記事と、小波が一〇月三十一日に下関で書いたという「ハガキ通

信」¹¹が掲載されている。また一月七日付の『読売新聞』には、「満鮮おみやげ小波氏の旅行談」が載せられている。小波が「ハガキ通信」で、「約平均一日に二回喋りました」と述べているこの口演旅行について、『読売新聞』も「観光の序に諸所得意のお伽噺をして一昨日無事帰京した」と報じている。

小波の自伝『我が五十年』にも、「大正二年は私に取つて甚だ登壇する機会が多かつた年であつた。殊に北海道満州及び朝鮮に於ける講演は、平均して一日に三回宛した事になつてをる」¹²と述べられている。小波はこの満鮮旅行をもとにした文章を雑誌『少年世界』、『文章世界』、『三越』に寄せている。¹³

一九一三年一月九日に行なわれた「日本橋倶楽部におけるオモチャ會講演會」において、小波は満鮮口演旅行の動機について次のように語っている。

満州には御存知の南満州鐵道会社といふものがあつて此鐵道会社の沿道に、会社が経営して居る学校が沢山あるのであります。其小学校に最早今日の処では児童が居りますので其子供等に話をして貰ひたいといふ御依頼が予てから私に有つたのであります。それが漸く今年になつて、約束を果すことが出来ました。又満州へ行く以上は、序でにどうしても朝鮮を見たいと思つて居りました所が、幸にも此機会を利用して、朝鮮では京城日報と朝鮮新聞といふ二つの新聞があつて此新聞社が案内をするから来て貰ひたいといふ訳でありました。此方は渡りに船

でありますから直ぐ之を快諾して参りました次第であります。¹⁴

一九一三年九月二十九日から同年一〇月三〇日までの、一ヶ月三日にわたつた満鮮旅行のなかで、小波が朝鮮に滞在したのは一〇月二日から三〇日までの一〇日間であつた。以下、小波の満鮮口演旅行の日程を簡略に述べてみる。

一九一三年九月二十五日午前八時に晴天の新橋を出発した小波は、京都に一泊して二六日の午後、大阪で夜行列車に搭乗、二七日午前一〇時に門司に着く。午後一時に嘉儀丸に乗つて二八日多島海から黄海に渡る。二九日午後二時に大連に到着する。遼東ホテルで休憩をとつた後、夜は青年會館で満州日々新聞社主催の口演会が行われた。大連で四日間滞在した小波は、湯岡子、遼陽、旅順、奉天を經由して、一〇月一三日の一一時、北京に着く。長春を回つた後再び奉天を經由し、本溪湖で一泊、翌日の一九日は五龍背温泉に泊る。一〇月二〇日の夜、雷雨の中を走つて満州の東端にある安東に到着する。二二日午前七時二〇分に安東を出発した小波は、午後一時半に平壤にたどり着くことで、初めて朝鮮半島の土を踏むことになる。

平壤に着いた小波は、直ちに小学校で口演を一回行つた後、夜は鉄道倶楽部家庭会に臨む。二二日の午前中は牡丹台を見物、午後一時半発の汽車で平壤を後にする。七時には京城に到着し、龍山鉄道倶楽部家庭会に参加した後、京城巴城館に一泊する。二三日の午後一時から鐘路小学校と桜井小学校で一回ずつ口演

会を開催する。二四日は、高等女子普通学校と龍山小学校、京城高等女学校で口演を行った。二五日、午前八時半に仁川を向って出発、午後には、仁川小学校で口演を行う。夜、歌舞伎座家庭会に参加した後、京城に帰泊する。二六日、午前八時半に京城を出発して正午に大田に着く。小学校で口演会をもつた後、守備隊兵士のために設けられた講演会で口演を行った。夜は大田座家庭会に参加している。二七日、午後一時に大田を出発して五時、群山に着く。群山座で口演を行った後、群山で一泊する。二八日、午前七時五十分群山を出発して、午後四時五分に大邱に到着する。大邱で一泊してその翌日の二九日、午前中に小学校で二回口演を行ってから、二時半に釜山に向って出発する。釜山に着いたのが午後五時一五分であった。夜、釜山座で中学生と家庭のために一回の口演を行った後、釜山で一晩を過ごす。

三〇日の最終日は、午前一〇時から釜山座で小学生を聴衆とした口演会が行われた。午後一時からは、同所で高等女学と商業学校の生徒が聴衆となる。その後、草梁鉄道青年会で最後の口演会が開かれた。たまたま草梁の小学校で開かれていた運動会を見に行った小波は、「内地にて見ると毫も異ならず、少年組のレース、少女隊のダンス」¹⁶⁾とその感想を述べている。夜九時出発の高麗丸に乗って釜山を後にした小波は、一月と三日目に下関に着き、満鮮旅行を終えている。

満鮮旅行の後、『読売新聞』に寄せた原稿には、「満州に三週間朝鮮に十日間、その序には北京天津にも遊んで前後四十日間

天長節の当日は下関に着して大正の御代を祝いだのであった。」¹⁶⁾と記している。

口演活動については、自伝『我が五十年』において、満州と朝鮮での口演をそれぞれ失敗、成功と評価している。まず満州での口演については、「シャートルの子供に『団子』が分らなかつたと同じやうに、満州の子供―眼界の狭隘なる聴衆に対しては、遂に私のお伽噺は失敗したのである¹⁷⁾」と述べている。

朝鮮での口演を回想した文章によると、小波は参観目的で訪問した「京城の高等女学校」で、口演を頼まれたという。最初は生徒が全員朝鮮人であったため、「分かるまい」と思つて断つたが、朝鮮人の女学生二百人くらいを相手に口演を行なつた結果、東京においてするのとほとんど同様な反響があつたという¹⁸⁾。この「京城の高等女学校」での口演については、『童話の聞かせ方』でも同じ内容を記録している。

小波が口演を行なつたという「京城の高等女学校」とは、「京城女子高等普通学校」のことと考えられる。女子学校といったことと、「京城女子高等普通学校」には一八四名の生徒が在籍していて、「朝鮮人の女学生二百人くらい」の前で口演をしたといつた小波の言葉とも符合するからである。

一九二三年六月二九日付の『京城日報』には、次のような記事が掲載されていた。

小波先生は寺町尋常高等校に自動車を乗り付け栞現寺町び両校四年以上の生徒に『指環大名』と題する面白いお話を

した、之は十年前に来鮮した際京城に於て講演したもので滑稽味の中に動物愛護と約束の尊重すべき事を小さき芽生えの印象に吹き込み大喝采裡に四十分の興味ある講演を終つた。

この記事によつて、「京城の高等女学校」で口演した話が『指環大名』だった可能性も考えられる。

満鮮旅行を終えた後、一九一三年一月九日に行なわれた「日本橋俱樂部に於けるオモチャ會講演會」に参加した小波は、「学校の先生方の訴へた所を見るのに、内地向きに教科書を書いてあるが、其事が殖民地の子供には分らぬから何うか殖民地教科書は別にして貰ひたい。」³⁰と、殖民地における教科書問題について言及している。そして、「朝鮮の子供が熱心に日本の教科書を読んで、日本の唱歌を歌つて、日本の言葉で、先生に何がありません彼があります、と言ふ所を見ると、実に愉快なものです。」と語る。

併合以来朝鮮では、教育方針に従つて「国語」の普及が徹底に行なわれていた。一九一一年八月二三日、勅令第三二九号「朝鮮教育令」の公布に際し、総督の諭告に「教育ハ特ニカヲ特性ト国語ノ普及トニ致シ、以テ帝国臣民タルノ資格ト品性トヲ具ヘシメムコトヲ要ス」とあり、朝鮮教育令第五条に「普通教育ハ普通ノ知識、技能ヲ受ケ、特ニ国民タルノ性格ヲ涵養シ国語ヲ普及スルコトヲ目的トス」と記し、また普通学校規則第七條の「教授上の注意事項第三号」で「国語ハ国民精神ノ宿ル

所ニシテ且知識技能ヲ得シムルニ缺クヘカラサルモノナレハ、何レノ教科目ニ付イテモ国語ノ使用ヲ正確ニシ、其ノ応用ヲ自在ナラシメムコトヲ期スヘシ」と規定し、高等普通学校、女子高等普通学校規則にも同文が記された。また専門学校規程の教授上の注意事項に「国語ハ日常生活ニ須要ナルノミナラズ、国民性ノ涵養上欠クヘカラサルモノナルヲ以テ、訓育ト相俟テ其ノ効果ヲ収メムコトヲ要ス」と記されている。

小波は、一九一三年一〇月二日から三〇日までの一〇日間、初めて朝鮮を訪れ、そのついでに朝鮮での口演童話も初めて試みた。

如何に朝鮮人が顔の表情が乏しいと云つても、怒つたら怒つたらしい顔をする、可笑しい所は笑うだらう一つ試しにやらうと思つてお伽噺の滑稽なのをやつて見た。始めはクスクスいつて居たが、其中にゲラゲラ笑ひ出した。能く聴いて見ると、私の書いた物を平常子供が読んで居るから、皆よく分つたと云ふことであります、それで大変安心した、是程朝鮮にまで早く言葉が分るやうになつて行つてるかと思ふと、実に頼母しい話であります。

という口演の感想からも分かるように、一九一三年の朝鮮における口演は、「国語」の問題に関心が集中されていた。朝鮮口演を終えて帰国した後の講演会においても、小波は次のように語っている。

朝鮮に就ては一言皆さんに御記憶を願つて置きたいのは、朝鮮に於ける小学令の中に、吾々同胞の治下に朝鮮人があると云ふことであります。朝鮮人の子供が、今は皆日本教育を受けて居る。で、是は吾々決して他人行儀をすべきものでない。又向うでは本気になつて、日本の教育を受けて居る。是も二、三年前までは出来なかつたが、国が併合になつたために、今では教育家が大いに扱ひよくなつた、朝鮮の家庭も喜んで日本の教育を受けさせるやうになつた。其学校も二、三行きましたが実に可愛い[※]。

前述したように、小波は『少年世界』の主筆として、「新日本の未来の為に、まずまず福利を謀ろう」と唱え、「国民教育」を強調、「言語と文学の画一」を主張していた。一日もはやく日本語を覚えれば、「見事新日本の新国民となり得る」との考え方を持ち続けた小波は、一九一三年の朝鮮初口演においても、「言語の画一」に注目、日本語がうまく通じたことで朝鮮での口演を「成功」と評価していたのである。小波は、一九二三年の朝鮮口演を終えた後、「以前来た時には折角話をして多少しも反響がなかつたが今度は驚くほど反響があつた。」²³と回想しているが、一九一三年の時点では、言語以外の反響は問題にならなかつたのである。朝鮮における小波の口演童話が、言語の問題の領域から童話を通じた「児童文学」への呼びかけとして作用するには、後一〇年を待たなければならなかつた。

第二章 巖谷小波の「全鮮巡回お伽講演会」

一九二三年五月一日付の『京城日報』に、次のような広告が目をはひく。

—巖谷小波先生全鮮巡回お伽講演会—

お伽噺大家として、皆さまとお馴染深い、巖谷小波先生が、本社の招聘によつて、六月上旬来鮮され、釜山を振出しに、全鮮をお伽行脚される事になりました。先生は皆さまの為に、どんな面白い、そして有益なお話を聞かせて下さる事でせう。本社は親愛なる全鮮の少年少女諸君と共に、先生の御来鮮の日を、楽しんでお待ちしております。ます。

この広告は、同年同月二日、四日、一〇日、一一日、二四日に同じく掲載されている。そして同年六月六日からは、「巖谷小波先生を迎へて」と題して「講演行脚」と「俳画分布」を報じる広告が載せられ、同月七日、八日、九日、一二日、一七日、一九日に掲載されている。またこのような広告と共に、「同氏来鮮の報一度伝はるや鮮内各地の学校は勿論当該官庁よりも是非当地方にも駕を曲げて児童や母姉の為に一場の講演を願ひたいと書面や或は直接来社」、「今回の巡講に際して何よりの記念であるので、一度如き歓迎を受け、市内は勿論、各地方よりの

申込み。日々殺到するの盛況を呈してゐる」といつた記事も講演事前に報道され続け、この企画に寄せられた高い関心を示している。

口演開催一ヶ月ほど前から持続的に行なわれた『京城日報』による宣伝は、朝鮮における小波の認知度や関心度を大きく高める役割を果たしたと考えられる。小波は『京城日報』を通して、「お伽国の王様小波先生」という決まった呼び名で紹介されていたが、逆にいえば、その紹介によつてこそ小波は朝鮮における「お伽国の王様小波先生」となり得たのである。

お伽口演会の期間中には、木太刀社と南柯社の後援で「小波先生歓迎俳句・俳画大会」も開催された。『京城日報』は、小波によるお伽口演会と俳画・俳句大会を開催することについて、「今回巖谷小波先生が童話普及の為め半島巡講を幸ひ、我社並に木太刀・南柯両支社は特に先生の出席を乞うて別項社告の如く一大句筵を開催する事にしたのである。」²⁴と、その趣旨を表明している。

六月一五日付の『京城日報』によると、「京城十三回、仁川四回、開城一回、平壤四回、鎮南浦二回、義州新義州安東泉六回、元山三回、咸興三回、大田二回、郡山三回、木浦光州各二回、大邱四回、釜山六回」で、全五五回の口演が予定されていた。それに、「先発隊として入城せる童話普及会の花房、下村、高橋の三幹事は三方に分れて講演予定地に出張し当局者及び本社支局長案内で会場其他の下検分秒を惜しんだ」²⁵ことも報じられている。そして、木太刀・南柯両支社の後援による「小波

先生歓迎俳句大会」は、六月二八日に予定されていた。『日本口演童話史』によると、小波が口演童話をしに行くこと、必ずと言っていい程、俳画を描かされるので、俳画を描くことと口演童話をやることを結びつけて地方に世話人ができ、世話人がマネージャーとして専業家して東北を受け持つ人、東京中心の人、関西を受け持つ人と分担を決め、俳画十本につき口演童話二カ所といったようになったという²⁶。

京城日報社と毎日申報社の共同主催で企画された「巖谷小波先生全鮮巡回お伽講演会」は、一九二三年六月二四日から同年七月一四日までの二〇日間にわたつて行なわれた。『京城日報』がほぼ毎日、小波の日程や活動を報道しているのに比べて、他の新聞による報道ぶりは下記のようなようである。時間順に沿つて述べておく。

一九二三年六月二六日、『朝鮮日報』——巖谷小波氏二四日午前九時四五分着、列車で入城、一九二三年六月三〇日、『毎日申報』——小波氏の講演会七月一日開催、一九二三年七月八日、『朝鮮日報』——巖谷小波氏上同、一九二三年七月一日、『毎日申報』——岩谷氏の講演と歓迎宴、一九二三年七月一日、『読売新聞』——巖谷小波氏、満州方面を旅行中だ。²⁷
全鮮巡回お伽講演会を終えて帰国した小波は、同年一〇月、朝鮮口演をもとに執筆した「学生紀行朝鮮再遊句行」を『中学世界』に、「再遊土産朝鮮飴」を『文芸倶楽部』に出している。上記に挙げた新聞にこれらの資料を加えて、一九二三年行なわれた「巖谷小波先生全鮮巡回お伽講演会」の日程を概観してみ

る。

東京駅から出発した小波は、一九二三年六月二四日、下関に到着する。下関に着いてすぐ関釜連絡船、徳寿丸に乗り込み、その日の夜には、朝鮮半島の釜山に着く。小波が一〇年ぶりの朝鮮行に利用した徳寿丸とは、一九二二年一月二日に就航した新しい船であった。小波は、一九二三年六月二四日曜日に下関を離れ、同日釜山で京城行きの夜行車に乗っている。『中学世界』に出した「朝鮮再遊句行」で、小波は、「六連島から玄海灘へと殆んど甲板に日を暮らす」と述べている。八時間程度の船旅を殆ど甲板で、風景を眺めながら過ごしたということから、昼航便の午前一一時発の徳寿丸に乗った可能性が最も高いと考えられる。

一九二三年六月二四日午後七時に「五月雨」の釜山に着いた小波は、さつそく午前九時四五分着の夜行車（二等寝台）に乗り換えて京城に向かう。釜山で小波が乗った夜行車は、京釜線である。一九二三年という時点で、京城・釜山間の京釜線には四九カ所の停車場があつて、「一日一マイル平均列車通過回数」は一三、四回であつた。

水原に着くと、京城から出迎えに来た南柯吟社・木太刀社の人々が乗込み、一緒に京城に入る。『朝鮮日報』の天気予報によると、小波が着いた当日の京城の天気は、晴れであつた。童話普及会の理事神原紫楼氏と共に六月二五日、午前九時五〇分に京城駅に到着すると、ホームには、山泉隈汀氏、愛国婦人会幹部、童話普及会幹事、泥谷本社支配人をはじめ、一〇余名の

社員及び在城の旧知人など、多数の人々が迎えにきていた。

自動車で不知火旅館におくられた小波は、少し休憩をとつた後、「紺色の鳥打帽子」で身仕度をして、午後二時から黄金館で愛国婦人会朝鮮本部の家族会における口演を行った。そして午後四時からは南大門小学校の講堂で、京城各学校職員及び師範学校生徒四年生以上、女子高普教員養成所生徒を相手に口演を行った。翌六月二六日には、全六回の口演を行っている。高女生と技芸上級生、元町、三阪、龍山の各小学校の四年以上の女生徒、日出、桜井、東大門附属各小学校の四年以上、女子高普生徒全員と進明、淑明高等科の生徒が口演の対象となつている。二七日の口演にも、龍山、元町、三阪の各小学校四年生以上、技芸上級生、淑名、進明生徒が対象となつており、その他には、女子普通、鐘路、西大門の各小学校四年以上、府内普通学校四年以上全部などが口演を聴取している。小波は、六月二四日付の『京城日報』の「巖谷小波談」において、「公開のお伽講演の聴衆は尋常三年以上の児童が適当して居る。上級生と下級生とを同様に取扱ふ時は下級生は退屈を感じる嫌があるやうだから斯んな場合は寧ろ三年生以下は別に切り離して講演する方が効果が多いやうに思はれる。」と述べていたが、そのためか、小学校四年生以上が主な口演対象となつている。

六月二七日は、五回の口演の後、菊地軍司令官邸に招待されている。小波を招待した菊地司令官とは、菊地慎之助陸軍大将のことである。菊地慎之助は一八八九（明治二二）年陸軍少尉に任官して軍人生活を始めた人物である。爾来陸軍省並に参

謀本部副官、第一六師団参謀長を経て陸軍省人事局長、参謀本部総務部長、教育総監部本部長などを歴補したが、のち更に進んで第三師団長、朝鮮軍司令官を経て、一九二三年には陸軍大将に任命される。軍事参謀官に補せられると同時に教育総監となった。³²

『京城日報』に基づいて六月二十七日における小波の日程を追ってみよう。まず、二十七日の京城劇場附近の二帯は、「お伽噺の泰斗巖谷小波先生の講演を聞かんとする小国民の渦を巻いてお祭りの様な盛観を呈した」という。「定刻五分自動車が劇場前に横付けとなりフロクコートに純白のパナマ絹を冠った先生の姿が現れると満場の児童は熱狂して万雷の如き拍手を浴せてお伽の王様を歓迎する、先生は息つく隙もなく貴公子の鶴の如な瘦軀を壇上に運び」³³。二時過ぎまで口演を行った。ひきつづき午後三時半から、同所で公普生徒の前に口演をした後、旅館に戻って少し休憩をとっていると、軍司令部より出迎え用の自動車が来て、龍山階行社に向かう³⁴。龍山階行社では、午後六時から家族講演会が開催された。菊地軍司令官夫人、牧田軍医部長夫人、安満軍参謀長夫人をはじめ、将校夫人及びその家族七百余名が出席した講演会であった。「讃崎高級副官の開会の挨拶があつて先生は青酒な和服姿を壇上に現し例の砕けた親しみのある態度で」講演を行つて、七時に閉会した。七時半からは、菊地司令官邸で小波一行及び京城日報社員のための晩餐会が用意されていた。「菊池軍司令官安満軍参謀長牧田軍医監始め階行社役員、主鬢の巖谷小波先生泥谷本社支配人其他社員

随員合して十七名が華かにデコレションされた食堂」に集まつた。菊地司令官が立ち上がりつて挨拶を述べると、これに対して小波は、「久しく半島に旅行し度いと思つて居た際京城日报社の招きに依つて其意を得且今夕は階行社に於てなした講演が児童教化の一助ともなれば満足である。」と答えた。『京城日報』は伝えている。晩餐会は、午後九時四〇分頃閉会した。

六月二十八日、午前八時五〇分に京城を後にした小波は、午前一〇時、仁川普通学校において第一回目のお伽口演を行った。仁川では、全五回のお伽口演が開催されたが、特に、仁川寺町東本願寺の日曜学校は当分休校中だったにもかかわらず、二十八日午後一時から開校式を挙げ、二時から口演を開いている。小波は休憩時間を利用して、自動車で仁川築港を視察した後、公会堂に向かい、三時半からの婦人講演に臨んでいる。そして同日午後六時からは、「小波先生歓迎俳句大会」が本町一丁目の不老閣楼上で開催された。

盛況をなした大会の状況を、『京城日報』は、「小波先生歓迎俳句大会」は「到底出席者全部を収容し切れると云ふので会場の狭隙を憾みつ々も已むを得ず受付は入口を締切つた」、「憾み事を残しつ々引返した人は四、五十名にも及んだであらう」³⁵と報じている。会場に収容した出席者は一六〇名で、人々は会場に十重二十重の輪を描いて座つた。会場の席題、「夏の月」をもって出席者が句作に臨んだ時、小波は別室で、宿題であった「炎天」「団扇」の選句を行った。俳句選者の発表と小波の講演があつて、大会は幕を下ろした。

六月二十九日、列車に乗った小波は、午後三時五〇分元山に到着する。同日、夜八時半から翌日午後三時過ぎまで、四回の口演を行った後、三〇日の午後四時一三分の列車で、咸興に向かつて出発する。元山を離れる際には、「石原府尹、西脇、山口、平岡、竹久、加藤の各学校長、古賀商業書記長、長谷本社支局長其他有志多数」の見送りを受けており、なかでも小波は、「石原府尹及び自動車の提供を蒙った元山海水浴株式会社の好意」³⁶に深く感謝の意を表したという。元山を離れた小波が咸興に着いたのは、午後八時過ぎであった。一九二三年六月三日付の『毎日申報』には、「日本童話界の第一人者である巖谷小波氏の講演会は本月三十日に当地で開催する予定であったが、一日延期して七月一日午前八時から十時まで開かれる」という記事がある。また、七月八日付の『朝鮮日報』には、「去る三十日に巖谷小波先生が咸興に來臨して当地各学校生徒及び一般学父兄諸氏に講演を行なった」という記事が掲載されている。『毎日申報』の記事によつて、三〇日に予定されていた口演が一日延期され、七月一日に開かれたことが分かる。咸興での口演は、七月一日午前八時から全三回にわたつて行われた。

七月一日午後二時、咸興の真砂座で一般人を相手に口演を行った後、小波は再び五時半発の列車に乗込み、京城に向かった。七月三日付の『京城日報』は、「二日早朝より京城へ引返しした巖谷小波先生の一行は同日午前八時四十分発列車で開城に至り山内郡守伊森専売所長其他官民多数の出迎へを受け伊森所長の案内にて専売局出張所を參觀」したことを報じている。午前一

時から、開城商業学校講堂で小学校・普通学校生徒及び主婦会員などを相手にしたお伽口演があつて、午後一時からは、同所で商業学校・松都高等普通学校・開城学堂商業部・好議敦女子高等普通学校生徒及び一般人を相手にした口演が開催された。口演の後には、朝鮮唯一の少年刑務所を視察し、午後三時一〇分発の列車で、平壤へと移動する。夜一〇時半、平壤に着いた小波は、白神女学校長、佐藤府内務課長らの出迎えを受け、柳屋ホテルに案内される。三日は、午前八時から午後三時まで四回のお伽口演を行った後、妓生学校を參觀する。小波は「再遊土産朝鮮館」において、「無表情を誘とする様に、冷然と客に待す工合は、京都の舞妓の様である。それでも此頃は、内地人の座敷に出る事が多くなつたので、大分内地化されて来た者もあり、中には内地から新渡りの流行唄なぞを、巧みにうたふのもあると云ふ」³⁷と、妓生学校を參觀した感想を残している。

平壤における歓迎会は、三日夜七時半から柳屋ホテルで開催された。七月六日付の『京城日報』は、この歓迎会の様子を次のように報道している。

会するもの膳覆審法院長、関口検事長、林田旅団長、宮館府尹、渡辺内務部長、藤原警察部長、大橋平每社長、横山大銀頭取を始め各方面の代表者三十四名小波氏は白地に紗の羽織袖と云ふ瀟洒な服装で貴公子然たる姿を現し白神女学校長、矢橋本社支局長の紹介で一々挨拶をなし開宴まで

を煽風器の風に吹かれながら歓談を交渉する。かくてデザートコースに入るや宮館府尹立つて歓迎の辞を述べ、これに対し小波氏歯切れの好い調子で鄭重なる謝辞を述べ、³⁷いいで大橋平毎社長小波氏の為め盃を挙げて健康を祝し和氣霧々裡に午後九時半宴を撤したが、膳覆審法院長は小波氏に「宅の子供が是非先生の書かれたものを戴いて来て呉れと申しますから『永き日を油断に刻む時計かな』の鬼の昼寝の俳画を頂願したいと思ひます」と父親の慎情を吐き林田旅団長は『桜咲く日本に生れ男かな』の俳画を選び、「これこそ眞に帝国の国体美を謳歌してゐるものだ、子供の行末を祝福してこれを贈つてやります」と尊い親心を遺憾なく表現してゐた。

七月四日午前八時、小波は鎮南浦に足を運んでいた。教育会による朝食会に参加した後、八時半から小学生、普通学生及び商工学校生徒一千余名が集まつた小学校講堂において、口演童話を試みた。ひきつづき午前一〇時からは、小学校、普通学校の女子生徒及び一般婦人を対象にしたお伽口演を行なつた後、一時発の列車で、安東に向かい、六日まで安東ホテルに泊っている。

小波が安東県に滞在していた七月五日、『京城日報』には、「金色夜叉の主人公」「小波氏の金色夜叉のモデル話」と題した記事が掲載される。その記事を見ると、「小説『金色夜叉』の主人公公貫一が当時文壇の寵児で日本童話の開拓者たる巖谷小波

氏であるとは専ら噂される所で勝手にそれに決めて居る人すら少くない」と述べ、小波の失恋事件が起こる以前に尾崎紅葉が西洋の小説から『金色夜叉』の構成を立てていたことや小波の発言などをとりあげ、「かうなつて来ると世間で噂される金色夜叉のモデル問題も大分怪しくなつて来るが之は永久に秘められる謎であらう。」と述べている。この記事の内容は、小波自らが語つた『金色夜叉の真相：所謂の間貫一の告白』などの内容とも一致する。

さて、『金色夜叉』のモデル問題は、七月七日付の『毎日申報』紙上にも同じく掲載されている。しかし、面白いことに、その内容においては根本的な違いを見せている。日本語の『京城日報』の記事から、巖谷小波が『金色夜叉』のモデルだという噂話の部分だけをハンゲルにもつてきてくるような印象がある。その記事を見ると、「長恨夢の主人公、李秀一が当時文壇の寵児で日本童話の開拓者として京城日報主催で朝鮮各地を巡回し、童話講演で数十万名の男女学生を熱狂させている巖谷小波氏であることは疑えない事実のようである。」³⁸と報じられており、興味本位になつて居ることが窺われる。この『金色夜叉』のモデル問題³⁹に関連しては、『京城日報』において、後もう一回掲載されている。それは、一九二三年七月一九日付による、「歓迎宴の席上を賑はせた『金色夜叉』のモデル問題」という記事である。光州の「河畔の春の家」という料亭で開かれた小波の歓迎会で、「当夜宴席に待つた認妓の一人が先生を知つて居ると云ふ、何処で知つて居るかと訊くと『だつて先生

は金色夜叉の寛一さんぢやありませんか」と来たので一同ドツと大笑ひ」、のような出来事があったという。すなわち、お伽口演、俳画、俳句の他、朝鮮で『長恨夢』という新聞小説に翻案されて人気を集めた『金色夜叉』の主人公のモデルだという噂話は、小波に寄せられる関心をより高める効果となったと考えられる。

『金色夜叉』のモデル問題」が新聞を通して浮かび上がった時、小波は安東でお伽口演を展開しつづけていた。七月六日午前十一時、朝鮮における三九回目の口演を安東小学校で行った後、午後六時半発の列車で京城へ向かう。そして翌日の朝七時一五分、一四日ぶりに京城駅に下りることになる。その夜七時には、「長野学務局長浦原通信局长原土本部長澤村京城府理事官、各学校長橋本三越出張所長等約三十名本社からは泥谷支配人以下社員数名」が出席した歓迎会が、朝鮮ホテルで開かれた。

京城で口演を行った記録はなく、翌八日の午前七時一五分に京城を離れている。次の口演開催地である水原に到着したのは、午前八時半であった。鶴崎郡守、近藤面長の外、官民有志多数の出迎えを受けて直に自動車に乗り、公会堂の口演会に臨んだ。水原では、全三回のお伽口演を行い、再び自動車で駅におくられ、一〇時発の大田行列車に乗る。午後一時半から東本願寺で開催された口演会には、朝からの雨にも関わらず、正午から多くの一般聴講者が集まっていた。大田でも全三回の口演を行った後、午後四時五分の大田発湖南線列車で、今度は郡山に向け

出発した。

予定は、八日午後と九日午前に郡山で各一回の口演を行い、その後、全州に向かうことになっていた。しかし、全州に向かう前に、小波は裡里で一回の口演を行っている。『京城日報』によると、「裡里は最初日程になかったが土地の有志の懇願もだし難く態々全州の講演を一時間遅らし其一時間を特に此の土地の為に割く事になった」という。このような予定以外の口演の申込は何件もあったようである。光州で口演が始まろうとした時も、松汀里の代表者三名が会場まで押し掛けて来て、『松汀里でも是非、十分でも五分でもよい、それが出来なければ唯お顔を見せて頂くだけでもよい』となかなかの執心で「頼んできたという。しかし、日程の都合により、松汀里での口演は実現できなかった。

「全北須学務科社会全州郡全州教育会」などの協力、後援を受けていた小波は、都庁から提供された自動車で郡山まで移動している。郡山で午前一〇時からお伽口演を行った後は、大急ぎで午前十一時五〇分の裡里行汽車に乗っている。裡里での口演会が終わった後は、再び道庁から提供された自動車を利用して、全州に向かった。小波一行が全州に入ったのは、午後三時である。七月一日付の『毎日申報』は、「地方集會」欄において、「岩谷氏の講演と歓迎宴」と題した記事を載せている。

朝鮮における小波の口演スケジュールは、全体的にもかなりきつく立てられていた。なかでも、上記に述べたように、七月九日は、郡山、裡里、全州を一日で回るという日程で、『京城

日報』(一九三三年七月三日付)の記事を借りると、「結局此日は京畿、忠南、全北の三道を股にかけ前後四回に亘つて長広舌を揮つた訳である」。そして、このようなハードなスケジュールに対応する小波の様子は、「格別疲れた風もなくケロリとしてござる。先生の精力主義、働き主義は確に驚嘆に値する。」⁴⁰と報じられている。

七月一〇日、午前八時に全州を後にした小波は、光州を経由して翌一日から一二日にかけて、大邱に滞在、全四回のお伽口演を行った。午後五時一二分の列車で大邱を立ち、馬山で一夜を過ごす。一日は、馬山小学校で口演した後、鎮海に向かう予定だったが、変更され、先ず鎮海に行つて口演を行ない、再び馬山に引返して馬山小学校における口演を行なつた。それから午後五時一二分の急行列車に乗つて、最後の口演開催地、釜山に向かつた。

一三日の夜、釜山の東萊温泉に入り、「一脚以来初めてゆつたりした気持ちになつて温泉気分を味つた」⁴¹小波は、「汗二十日温泉の一夜に流しけり」⁴²と、その感想を述べている。東萊温泉については、『文芸倶楽部』に掲載した『再遊土産朝鮮館』においても、「釜山附近では、何と云つても東萊温泉が好い。昔は知らず今の所では、全く内地式に設備されて居るから、渡つて直ぐ此所へ来ると、まだ朝鮮ではないと思はれ、また帰りに此所に寄ると、もう内地に着いたかの感がある。」⁴³と述べている。

『京城日報』には報じられてないが、『釜山公立高等女学校

資料』に、「七月十三、四日、巖谷小波氏講話」という記録が記されていた。この記録によつて、一三日釜山に着き、東萊温泉に入る前に、釜山公立高等女学校で一回口演を行なつたことが推測される。もともと釜山での口演は、巡回口演の一番目に予定されていた。それに関連して『京城日報』は、「小波先生の講演は釜山を以て入鮮第一着の講演地と予定されてゐたが不幸猩紅熱の蔓延に禍せられ日程を最後の十四日に変更する事となり」⁴⁴と報道している。また、「お伽行脚の最後の地、釜山では三箇所講演したが折悪く程紅熱が流行して居た為め多数の可憐な児童達に聞かせることが出来なかつたのは遺憾千万」⁴⁵とも報じられており、小波の巡回口演期間中、釜山に紅熱が流行つていたことが分かる。紅熱は、その年末まで流行つたように、『釜山公立高等女学校資料』によると同学校は、十一月一日から紅熱により一週間の臨時休校に入つていた。

朝鮮滞在最後の日である七月一四日の土曜日は、釜山の第三小学校で四〇分間、一回目の口演をなした後、自動車で国際館に移動、約一時間にわたつて『水地獄』を口演した。そして午後四時から、釜山高等女学校に集まつていた六百名の同校生徒及び卒業生、一般人を相手に、『石の花』を口演した。この最後の口演会に関する『京城日報』(一九三三年七月二日付)の記事をみると、「大喝采の裡に講演が終る安藤校長がツト立つて『大変面白いお話を承りました、皆さんはもう一度聴き度いでせう』と云ふと全生徒挙つてベチ、と来た、先生も止むを得ず二度のお勤め『講演のアンコールは始めてです』と前提

しながら『客兵衛の改心』を一席。」となつてゐる。結局、「アンコール」に応じた『客兵衛の改心』が、「全鮮巡回お伽講演会」における最後の口演となつた。

「講演のアンコール」を受けながら「全鮮巡回お伽講演会」を終了した小波は、松島を視察した後、午後七時から南濱芳閣で開かれた晩餐会に参加する。そして九時半発の昌慶丸に乗り込み、朝鮮半島を後にした。

一九二三年六月一〇日付の『東亜日報』と、同年七月四日付の『朝鮮日報』には、「関釜連絡時間変更」が掲載されている。同年七月一日から変更された関釜連絡船の発着時間を総合すると、午後九時半発の昌慶丸に乗つた小波は、翌一五日午前七時に下関に着いたと推測できる。

小波が日本に帰つた後、『京城日報』は、七月一七日と二二日に、小波の文章を載せている。また、同月の一九日、二〇日、二一日においては、小波の「全鮮巡回お伽講演会」を振り返る「小波先生のお伽行脚」を連載している。小波は、七月一七日付の『京城日報』を通して、「六十回に亘る講演を試みた此の日数が丁度二十日間ちよつと汽車から降りてはしやべりしやべつては又乗ると云ふ風で多い時には一日の内に五回も講演した事がある二回の聴衆を平均千人と仮定しても総数六万人となり我ながらよく是だけの人を集めたものだと思ふ」という書き出しで、「今回の朝鮮旅行は予想外に沢山の収穫があつた私はかねがね朝鮮の人に内地の事情を知らせることよりも内地の人に朝鮮の事情を知らせることが急務だと思つて居た矢先結構なお

土産が沢山出来たので喜んで居る次第である。」と述べている。

小波の「お土産」とは、同年一〇月一〇日、『文芸倶楽部』に「再遊土産朝鮮船」という題をもつて出されている。「今度又十年ぶりで、特に朝鮮^{朝鮮}に二十日を費し、約二十カ所に、六十回斗り、お喋りをしてまはつて来た。その相手の三割五分は、正に新しい可愛い同胞、即ち鮮人の児童であつたが、それがまた内地に於けると等しく、殆どハンドキャップ無しに、よくお話を理解してくれたのは、少からず嬉しかつた。」⁴⁶と、「全鮮巡回お伽講演会」を回想している。

さて、この「再遊土産朝鮮船」には、「所謂の日韓融通の一策」という副題が付けられている。「双方の意志の疎通」の必要性を主張しているこの文章は、一九一〇年、『少年世界』の「日韓併合記念号」における小波の文章を喚起させる。小波は『少年世界』の「日韓併合記念号」において、「新日本の未来の爲めに」「相互の意思の疎通」が必要であることを主張していた。「意思の疎通を謀る爲めに、言語と文学の画一を要する。」と述べ、朝鮮の少年が一日も早く日本語を覚え、新日本の新国民となり得ることを唱えていた。一九一三年の朝鮮訪問を通して、「言語の画一」が強調されていたが、一九二三年の時点に至つては、「文学の画一」を謀るための実践として朝鮮口演に努めている。「新日本の未来の爲め」から、「日韓融和の爲め」と、朝鮮に対する小波の考え方は、根本的なところで一貫していたのである。一九三二年三月発行した『童話の聞かせ方』のなかにも、「新附の民は、今こそまた若干の距離はあるが、将

来は同じ日本国民として、同化し居るといふ所に、少からぬ親しみがある。」⁴⁷と述べられている。

また「再遊土産朝鮮館」には、「内地人」と「鮮人」を花に例え、前者が「桜の様な牡丹の様なもある代りに、紫陽花の様な、蝦夷菊の様なもある」に対して、後者には「水仙の様な、萩の様な、乃至石竹の様なが多い」といい、「此辺も日韓融和によつて、追追同化しつゝ行くであらうか」と述べている。小波の焦点が、始終「日韓融和」や「内鮮同化」に置かれていたことが窺える。

一九二〇年代、斎藤実総督は三・一運動以降、激化する民族運動への対応策として、「四大政策」を新たに採用した。四大政策とは、政治宣伝の強化、親日勢力の育成保護利用、参政権問題と地方制度の改編、階級分断による分割統治をいう。ここで注目したいのは、「政治宣伝」政策である。姜東鎮の『日本の朝鮮支配政策史研究』によると、一九二〇年代に斎藤実総督によつて採用された政治宣伝は、対内政治宣伝と対外政治宣伝の二つの対象に集中していた。対内政治宣伝は朝鮮民衆を対象とするもので、「一視同仁の文化政治を民衆に普及し、その理解を促すばかりでなく、総督政治を信頼するよう、これを指導する」といった、反日独立運動の鎮静を究極の目標とするものであった。それに対して、対外政治宣伝は、朝鮮における日本の虐政の実態を隠蔽することによつて、対米英外交関係悪化の防止と、在外朝鮮人の独立運動封殺を目的とするものであった。また同書において姜東鎮は、総督府が民心收拾のための本格的

宣伝工作の段階で新たに採用した方法の、ピラなどの各種印刷物、御用紙『京城日報』による宣伝や、『毎日申報』の半強制配布、活動写真などの視聴覚に訴える、いわゆるマス・メディアによる宣伝について、次のように述べている。

総督府は、新聞も政治宣伝に多く利用した。新聞には、総督府の御用紙『京城日報』と、姉妹紙『毎日申報』（ハングル）、『セウル・プレス』（英字新聞）があるが、国内宣伝には、主に前二者を利用するたわら、各地の民間日本人経営の諸新聞も利用した。まず御用紙を見ると、総督府は、三・一運動以降、国内政治宣伝機関として『京城日報』と『毎日申報』の強化拡充を図り、総督政治宣伝のための広報活動に利用するとともに、各種の時局講演会の開催、日本人移民の奨励、日本資本の誘致、日本観光団招致のための宣伝や、民族紙『東亜日報』・『朝鮮日報』に対する挑戦的対抗のためにも利用した⁴⁸。

「文化政治」政策による政治宣伝活動は、一九二〇年秋頃から本格化され、一二年二年に至つて絶頂に達したと記されている。「巖谷小波先生全鮮巡回お伽講演会」は、政治宣伝活動が盛んに行なわれていた時期に企画された。しかもその企画は、「国内政治宣伝機関」として最も中心的に利用されていた、『京城日報』『毎日申報』の両社によつて立てられたものであった。朝鮮における口演活動を、「所謂の日韓融通の一策」と

して認識していた小波は、「日韓融和」「内鮮同化」政策を支持、「朝鮮の爲め帝国の爲めに慶賀して止まない」との立場を保っていた。

『巖谷小波のお伽噺』において続橋達雄は、「指摘すべきは、小波が学校教育から離れた場面で児童文学の役割を考えていることである。これは学校教育の補助的役割を果そうとして出発した『少年国』以降の、少年雑誌たちが堅く守った態度であり、小波もそれを引継いでいる。」⁴⁸と述べている。続橋達雄が指摘しているように、小波は「児童文学の役割」を考え、それを「お伽講演」という形で実践していた。「童話普及会」を背景に、「童話普及の爲め」という名目の下、朝鮮の二〇箇所を巡回しながら童話を聞かせた小波のお伽口演は、およそ六〇回にも及んでおり、その聴衆は六万人をはるかに超えたと推測される。小波自らも、「驚くほど反響があつた」と語っているように、一九二三年朝鮮で行なわれたお伽口演は大盛況をなした。そこには、「児童運動」の勃興によつて盛り上がりつつあつた朝鮮内部における「児童文学」への動向が、大きく呼応していたとも考えられる。朝鮮内部においても、「学校教育から離れた場面で児童文学の役割を考えている」動きが、段々可視化されていたのである。

すでに『九大日文』四号（朝鮮における「近代児童文学」の始まり―朝鮮児童文学と巖谷小波 その一―）において述べたように、天道教に支えられ立ち上がった「少年会」は、その組織的な活動によつて、全国的に影響を及ぼし、各地に「少年会」を続出

させた。その中心部には、方定煥による「セクトン会」が位置していた。「セクトン会」の創立趣旨の項目には、「童話及び童謡を中心にして一般児童問題まで行なうこと」が一番目に挙げられていて、「児童文学を通して一般児童運動を展開しよう」⁵⁰という主張が提唱されていた。このような趣旨のもと、童話会、講演会、歌劇会、音楽会などが活発に開かれるようになった。このような気運のなか、総督府の御用紙である『京城日報』と『毎日申報』は、小波の「全鮮巡回お伽講演会」を企画したのである。口演開催の前に、日本からは「童話普及会」の幹事三名が開催地を事前に巡回し、また『京城日報』の社員とともに「童話普及会」の理事が口演に同行している。朝鮮では、愛国婦人会と南柯吟社、木太力社及び各地の面長（日本の町村長に相当―筆者注）、郡参事、地方委員、郡守、学校長などの地方の首長、有力者が積極的に口演開催に協力、支持していた。小波の口演における、総督府所属の官公立機関の組織的な支援関係は、朝鮮総督府をその背景にしていたことを裏付けている。

ここで、小波の口演はいかなる意図によつて企画されたかという問題が生起する。実際、小波はどういう童話を選び、どのような工夫をして朝鮮側の聞き手に聞かせたのか、それによつて小波が朝鮮側に伝えようとしたメッセージとはいかなるものだったのかが問わなければならない。

次稿では、小波が朝鮮側に「聞かせた」童話及び、「読ませた」童話について詳察したい。朝鮮口演に選ばれた童話の素材、内容、原作を改作した意図やその程度、聞き手集団の年齢層に

よる話し方などを検証する。また、童話の目的と、「聞かせた」行為がもつ意味合いについて検証する。さらに、『毎日申報』に掲載された一篇の小波の童話を分析、その童話の性格を明らかにする。それと同時に、『毎日申報』以外の、当時朝鮮で発行されていた新聞及び雑誌に児童文芸作品が掲載されていく経緯をたどることを通して、小波との関連性を考察し、その中から朝鮮に児童文学が定着していく過程を見出すことを目標とする。

【注記】

- 1 小波は、この継母に関して自伝でもよく語っているが、朝鮮におけるお伽講演会の際にも育児法と関連した実例として取り上げている。
- 2 巖谷秀雄『童話の聞かせ方』（賢文館、一九三二年）、四頁。
- 3 佐藤道雅『日本児童文学の成立・序説』（大和書房、一九八五年）、一二頁。
- 4 朝鮮総督府『増補朝鮮総督府三十年史（一）』（クレス出版、二〇〇一年）、三三四頁。
- 5 『毎日申報』は、一九〇四年七月八日、イギリス人の Ernest Thomas Belli が創刊した『大韓毎日申報』を統監府が買い入れて、一九一〇年八月三〇日から『毎日申報』に改題したものである。経営上は、日本語版の機関紙、『京城日報』に統合させて『京城日報』の社長と編集局長の管理下に置いた。一九二〇年初までのいわゆる「武断政治」期間における唯一のハングルの日報紙であった。
- 6 『京城日報』は、伊藤博文が統監府の書記官、伊東祐侃により『漢城新報』と『大東新報』を合併させ、一九〇六年九月一日に創刊したものである。併合前から、統監伊藤博文によって御用紙となり、寺内正毅の総督就任後は、徳富蘇峰を監督に、阿部充家を第三代社長に据えた。一九一八年六月、阿部の辞任後は、加藤房蔵が、一九二一年六月からは秋月左都夫、一九二三年には副島道正が、一九二七年には松岡正夫があいついで社長になった。創刊当時はハングル版と日本語版で発行したが、一九〇七年四月二日からはハングル版を中止して日本語版のみ発行することになった。
- 7 『朝鮮日報』は、一九二〇年三月五日に、趙鎮泰を社長に創刊されたハングル新聞である。
- 8 一九二〇年四月一日創刊された『東亜日報』は、招待社長の朴泳孝、設立者の金性洙が中心となった民間新聞であった。一九三〇年四月一六日から八月三一日まで停刊となっており、一九三〇年九月二日から刊行を再開している。ハングル新聞である。
- 9 巖谷小波『朝鮮の併合と少年の覚悟』『少年世界』第一六卷第一三三号（博文館、一九一〇年九月）、二三頁。
- 10 巖谷大四『波の聲音—巖谷小波伝—』（新潮社、一九七四年）
- 11 『読売新聞』一九一三年一月三日付。
- 12 巖谷小波『我が五十年』（東亜堂、一九二〇年）、三二六頁。
- 13 一九一三年二月一日『満鮮お伽日誌』『少年世界』（博文館）、一九一三年二月一日『満鮮句行かうもあるうか』『文章世界』（博文館）、一九一四年一月一日『満鮮の小国民』『三越』（三越呉服店）、一九一四年五月一日『満鮮いつは噺』『少年世界』（博文館）、一九一四年六月一日『満鮮いつは噺』『少年世界』（博文館）

- 14 巖谷小波「満鮮の小国民」『三越』(三越呉服店、一九二四年一月、一頁)。
- 15 巖谷小波「満鮮旬行かうもあらうか」『文章世界』(博文館、一九一三年二月)、七八頁。
- 16 『読売新聞』一九一三年一月七日付。
- 17 巖谷小波、前掲書(『三越』)、三三三頁。
- 18 巖谷小波、前掲書、三一六頁。
- 19 『京城日報』一九一三年六月二九日付。
- 20 巖谷小波、前掲書、二一頁。
- 21 巖谷小波、前掲書(『三越』)、二一頁。
- 22 巖谷小波、前掲書、二二頁。
- 23 『京城日報』、一九一三年七月二七日付。
- 24 『京城日報』、一九一三年六月二二日付。
- 25 『京城日報』、一九一三年六月二五日付。
- 26 内山憲尚『日本口演童話史』(文化書房博文社、一九七二年)、一三頁。
- 27 『朝鮮総督府統計年譜』の「乗船者月別累年比較」表によると、小波を含む一九二三年六月の朝鮮行の乗船者は、およそ二〇、六四五に達している。ちなみに当時の旅客運賃料金は、朝鮮と満洲行は通行税が必要でなく、一等級が一〇円六五銭、二等級が七円一〇銭、三等級が三円五五銭であった。日本国有鉄道広島鉄道管理局『関釜連絡船史』、三九頁参照。
- 28 京釜線とは、京城(現ソウル)と釜山を結ぶ複線鉄道のことである。四四、五キロで、一九〇五年一月一日に全区間に渡って開通した。朝鮮総督府『増補朝鮮総督府三十年史』(クレス出版、二〇〇一年)、一四二頁。
- 29 『韓国鉄道要覧表』(鉄道庁広報担当館室、一九九三年)(筆者記)
- 30 『京城日報』、一九一三年六月二六日付。
- 31 これについては『京城日報』以外の新聞には報道されておらず、小波は朝鮮再遊旬行(『中学世界』博文館、一九一三年一〇月)において、「一夜龍山の菊池司令官に招かれる」と記している。
- 32 『日本人名大事典(新撰大人名辞典)第二巻』(平凡社、一九七九年七月)参照。
- 33 『京城日報』、一九一三年六月二八日付。
- 34 龍山という町は、「日本人が新しく開いた町であり、そこには朝鮮に駐屯する日本軍の軍司令部と、朝鮮鉄道の基地や官舎(遊廓)など、植民地としての朝鮮の首都にふさわしい統治と支配の構築が集中している場所」であった。川村湊『海を渡った日本語植民地の「国語」の時間』(青土社、一九九四年)、一三六頁。
- 35 『京城日報』、一九一三年六月三〇日付。
- 36 『京城日報』、一九一三年七月三日付。
- 37 巖谷小波「再遊土産朝鮮船」『文芸倶楽部』(博文館、一九一三年一〇月)、一五四頁。
- 38 『毎日申報』、一九一三年七月七日付。(筆者記)
- 39 『京城日報』、一九一三年七月二日付。
- 40 『京城日報』、一九一三年七月二日付。
- 41 『京城日報』、一九一三年七月一日付。
- 42 巖谷小波、前掲書(「朝鮮再遊旬行」)、九六頁。
- 43 巖谷小波、前掲書(「文芸倶楽部」)、一五五頁。
- 44 『京城日報』、一九一三年七月三日付。

- 45 『京城日報』、一九三三年七月二一日付。
- 46 巖谷小波、前掲書（『文芸倶楽部』）、一五一頁。
- 47 巖谷小波、前掲書（『童話の間かせ方』）、一〇八頁。
- 48 姜東鎮『日本の朝鮮支配政策史研究』（東京大学出版会、一九七九年）、二八頁。
- 49 『日本児童文学』第一六卷六号（日本児童文学者教会、一九七〇年）、四三頁。
- 50 鄭寅燮『セクトン会子ども運動史』（学園社、一九七五年）、三二頁。（筆者記）

（九州大学大学院博士後期課程一年）